

金沢大学附属図書館報

第57回金沢大学暁烏記念式・記念講演

菩薩として生きる

金沢大学名誉教授 杉 本 卓 洲

1. 菩薩の意味

菩薩の原語はボーディサッタ（ボーディサットヴァ）で、「菩提薩埵」と音訳される。菩薩とはその短縮形である。ボーディ（菩提）は「悟り」、サッタ（サットヴァ、薩埵）は「生きとし生けるもの（衆生・有情）」を意味し、二つのことばよりなる複合語である。

ブッダに対する呼称として始まった。次のように四段階に分けられる。

出家して菩提樹の下で真理に目覚めるまでの修行（苦行）期間。「悟りを求め努力するもの」、すなわち「求道者」を指す。

誕生時。菩薩はトソツ天より白象となって母マーヤーの胎内に降臨し、生まれるや北方に歩行し「わたしは世界の第一人者である」と叫んだ、というように表わされる。「悟りを得ることの確定したもの」を意味する。

過去世。サルやゾウなどの動物まで菩薩と呼ばれ、ブッダの前生の身とされる。常に善行をなしているとは限らない。「悟りが潜在的で未発達なもの」の意。しかし、後世には献身的な者へと変容し、「悟りへの勇猛者」を表わすようになる。

青年期。結婚して子どもをもうけた時期。在家者も菩薩と呼ばれたことを示し、後期の適用。「悟りの可能性を内在するもの」。

このほか、「悟りが有情の形をとっているもの」、「悟りへの心を持つもの」、「悟りに執着するもの」、「悟りの達成に向けて全存在をかける人」、「菩提心を起こす原動力である如来蔵を具えた衆生すべて」と言った具合に、種々に定義づけられる。菩薩の意義や定義は経論の

数ほど、学者の数ほどあると言っても過言でない。

2. 菩薩の種相

菩薩は何も大乘仏教の専門語ではないが、大乘仏典に多く登場し、大乘教徒イコール菩薩と言うようになる。大体二種に分けられることが多い。出家の菩薩と在家の菩薩、山間（せんげん）の菩薩と人間（にんげん）（世間）の菩薩、不退転の菩薩と退転の菩薩、成就の菩薩と敗壞の菩薩といったように、である。

出家の菩薩とは山林に入り、ただ独り禅定に励み、文字通り「空」（空閑処）に住む者である。頭陀行を守り、在俗者はもちろん、同じ出家の仲間とも交わらず、僧院に来るのは病気とか説法・聞法のためとか限られていた。しかし、村里の中か近くにある僧院に住む出家の菩薩の方が、多数を占めていた。前者は山間の菩薩であり、後者は人間（世間）の菩薩に相当する。両者の間には、生き方をめぐって激しい対立があった。

法華経には、山間の菩薩が「我らは戒行を守っている」と言い、自分こそ真の道を行なっている者だと主張し、人間の菩薩を軽蔑し卑しんだ、とある。大乘の涅槃経にも、山林の空閑処に住む者は、自分たちこそ真の阿羅漢、大菩薩・摩訶薩である、とうそぶいた、と見える。般若経は、相手を盗賊とかにせ者と呼んだりして、その争いの模様をもっと生々しく伝えている。

このような菩薩同士の争いは、悪魔マールが喜ぶところであった。そこで真の菩薩は争いをやめさせ、一切衆生の橋梁となるべきとされる。ここで言う真の菩薩とは、在家の菩薩を指している。彼らは寺院や仏塔の建立、出家の菩薩たちへの食事や生活用具の供給などに当たるが、特に強調されるのは、病人の看護、教団分裂の阻止、正法の護持の三つである。病人への施薬のみならず、僧院内で病に苦しむ者があれば、自らの生命・血肉を投げ打って治療に当たるべきとされた。

教団分裂の阻止とは、上の記述と関連がある。出家の菩薩たちの争いの仲裁役を果たしたことを示す。正法の護持には、身命をかけて当たるべきとされる。一偈の法のために身を投じた雪山童子（せっせんどうじ）の物語などを想起させ、緊迫した状況を暗示する。

不退転の菩薩は成就の菩薩で、退転の菩薩は敗壞（はいえ）の菩薩に当たる。前者はその名の示す通り、大力あり、どのようなところにも赴き、辺地や邪見をも避けることはない。真金のごとく泥中に入っても壊れることはない。それに対して後者は、発心したばかりの菩薩で、力なく意志弱く、泥中に入ればすぐ錆びてしまう鉄のような者である。名利に執着し、素直でなく、他人の豊かさをねたみ、空の教えを信じようとしない。菩薩とは名ばかりで、修行の伴わない者である。しかし、このような菩薩たちにも、不退転の位を得る道が開かれている。それは周知のごとく「易行道」と呼ばれるもので、陸路を苦労しながら歩む「難行道」に対比される。これは菩薩の道、ひいては仏教自体の広大さを教えるものである。

3．菩薩とは名字のみ

菩薩とは、一般に六波羅蜜行の実践者とされる。とくに一番目の布施の完成が強調され、利他行・慈悲行に励む者、社会に奉仕・貢献する者と解されている。近年もてはやされているボランティア活動などにつながる側面を有している。しかし、ここでは別の意味で、菩薩の生き方の意義あることを指摘したい。

それは仏教の百科事典とも言える『大智度論』の中に見えるものである。「菩薩というもただ名字（みょうじ）のみにして空なり」、「菩薩は菩薩という名字に着するを破す」というのである。菩薩とは単なる名字に過ぎず、菩薩とは菩薩であることにこだわらない者だ、と言うのである。こういう生き方は、自らを仏教徒として押し出すことなく生きることであって、キリスト教徒が自らをキリスト者と謳い、イスラム教徒が自らの信仰を誇示し、他の宗教者との峻別の中で生きていく態度と大きく異なっている。宗教的対立の激しい今日の世界にあって、菩薩の生き方に学ぶべきものがある、と思うのはわたしのみであろうか。

杉本 卓洲 すぎもと たくしゅう

東北大学文学部印度学仏教史学科卒。
東北福祉大学教授、金沢大学教授、
金城大学教授を歴任。
平成13年から金沢大学名誉教授。



講演中の杉本卓洲氏